

えびす信仰の三源泉

——海神・市神・福神のルーツとその融合——

米 山 俊 直

The Ebisu Belief and Its Three Roots

YONEYAMA Toshinao

一 はじめに

さきに「えびす信仰研究の視座」をまとめたが、研究開始から三年以上の時を経過しながらなお、“えびす信仰”についての私の謎は解けたとはいえない。かえって、その正体がかめなくなっているように思う。そこで、あらためて“えびす神”の原点にもどり、その多面的性格を分析し直してみようと思う。

ここで“謎”というのは、つぎのようなことを指している。

①えびす神は七福神のなかで唯一の日本の神様である。大黒天、弁財天は仏教の天部の神様、寿老人、福祿寿は道教の神様、布袋は実在した中国の和尚とされている。そのなかで、ひとりえびすさまだけが、この国の神である。ところがその唯一“国産”の神になぜ“えびす”すなわち異邦人ないし外敵として差別されるような名前がついているのか。

“えびす”は、音をなぞった恵比寿、恵比須、恵美須、などの書き方にくわえて、戎、夷、胡、蛮、狄と、中華の視点からは四方の異民族を指す字があてられている。なぜか。

②えびす神の人気は高い。いまでも年中行事として関西各地の十日戎、関東東北にひろがる秋の恵比須講などとして民衆に人気のある民間信仰である。しかし、えびす神を祀る神社の神格は高いとはいえない。えびす神は海の神、漁民にとって豊漁をもたらす神であるが、明治維新後に国家神道が整備されてゆくなかで、海の神として住吉の神（底筒之男、中筒之男、上筒之男三神）を祀る住吉大社は官幣大社となり、ワダツミの神（底津綿津見命、中津綿津見命、上津綿津見命三神）を祀る神戸の海神社も官

幣中社である。しかし西宮神社は県社、大阪の今宮戎神社も府社どまりである（もっとも、大阪では天満宮など民衆に人気のある神社は、国家権力の保護を望まない気風があるともいわれる）。

つまり、蛭子大神は国生み神話でイザナミ、イザナギの間で最初に誕生したとされているのに、明治維新後の国家祭祀においては不当に疎外されていたとしか思えない。それはなぜだろうか。

- ③えびす神の発祥の地はどこか。えびす研究の端緒をつくった長沼賢海「えびす考」（1916）は、佐伯氏が巖島に宗像三神を祀った時（推古天皇元年—593年）に、同時に荒えびすを本殿の一角に祀ったのではないかと推定している。佐伯氏が日本武尊が東国で捕虜にした蝦夷を伊勢・大和を経て播磨、讃岐、伊予、安芸、阿波の五国に住ませた。それが佐伯部の祖とされている。現在も宮島には七浦七恵比寿が祀られている。私たちもそれで巖島神社に参詣して、七浦を一巡する機会を得たが、なおそのルーツについては良くわからない。たしかに巖島神社の一角に荒胡子社が存在していたが、それが東国から移住させられた佐伯氏一族が古くからの彼らの神を祀ったものかどうか、推測するしかない。そのほか、よくわからないままで過ごしていることが少なくない。

それで、あらためて本稿では、海神、渡来神、漂着神、漁民の豊漁神、などということからはじめて、市の神、商業神、そして農業神としての展開を検討し、最後にいわゆる福神として大黒と一対になり、また弁財天、寿老人、福祿寿、布袋などととも七福神のなかに位置付けられて行った過程を追求したいと思う。

二 海神としてのルーツ

[海神ヒルコ]

えびす神が関わっているのは、西宮神社の祭神として蛭子大神が天照大神、素戔鳴命と共に祀られていて、この蛭子神がえびす神とされていること。それはこの神が、記紀に登場する国生み神話で、イザナギ・イザナミ両神の最初に生んだ子であり、いわば未熟児として葦船で海に流されたが、西宮浜に漂着したのを祀ったと伝えられていることから、海に流され海から帰着した、ということからも明らかである。

松前健氏の『日本の神々』（1974）は、もとイザナギ・イザナミの両神が淡路島を中心とする海人（漁民集団）の一地方神であったという。「延喜式神名帳」の名神大社の淡路国津名郡淡路伊佐奈伎神社があり、「日本書紀」に履中天皇5年の挿話が記録されている。4世紀末から5世紀にかけての、応神・仁徳・履中の河内王朝—難波宮の時代のことである。二神が神話で、皇祖アマテラスの親神として国を生み、大八洲を創造した神になるが、「国

生みは、もともと淡路島を中心とする小規模な話であったのであろう。これが大八洲全体の国生みというスケールに拡大されたのは、ある時期における政治的配慮によるものである」(同書8頁)とする。そしてイザナミ女神は淡路島を胞(え)として次々に日本列島を生んでいく話になった。またオノゴロ島(友ヶ島・沼島などが比定されている)でイザナギ・イザナミが天の御柱を立てて、国生みを行い、その最初にヒルコが生まれたことになった。さらに松前氏はアマテラス・ツクヨミ・スサノオの三貴子について、「もし三貴子という思想が古くからあったとしても、それは日・月・素尊(スサノオ)ではなくして、日・月・ヒルコという形であったのではないかと考えている。蛭児は『古事記』では伊弉諾夫婦が国生みの前に生んだ最初の子で、生みそこないの不具児として語られているが、『書紀』の本文では、国生みの後高天原の支配者として日・月二神を生み、それに続いて蛭児を生むという形となっている。この不具児を天磐櫛樟船に載せて流し棄てる記事の後に、つぎに素尊が生み出され、これがやはり正常児ではなく号泣ばかりするので死の国である根の国に追いやられるのである。蛭児と素尊はともに異常児で、そのため処置されるという点は両者相似ている。根の国は、後にも述べるように、古くは地下の世界ではなく、海の果ての国であったらしい。海の果ての国に追われることも、趣旨においてはあまり変わらない。要するに、泉谷康夫氏なども論じたように、この二者は同一物の重複であるようにも見える」(同書67-8頁)という。そして『書紀』の一書の二が後の挿入で、二者を混同させていて、濃厚な加筆の疑いがあるとし、『日本書紀』の本文はもっと自然で合理的な文章に改めたものとしている。

そして要するに、蛭児が最初の生み損ないの子であるという伝承は、「淡路のイザナギの崇拜や神話に最初から属していた存在で、それこそイザナギのほんとうの子であったはずである」(70頁)とする。

吉井良隆西宮神社宮司の「失われたえびす信仰の本源」(1957)には、記紀の蛭児神話から“えびす神”は“ヒルコ神”であると主張し、その性格が海神であり、海上交通の守護神から漁撈の神になっていったとしている。

もともとが海人の信仰の対象であったイザナギ・イザナミの子であるから、蛭児大神が海の神であることはまちがいない。

【漂着神としての性格】

そして、西宮神社の伝承では「西宮の東方3キロメートルの鳴尾の浜の漁夫が武庫の海の沖で夜漁りをしていた時に、その網が平常より甚重く覚えたので悦び引き上げて見れば魚ではなく、奇しき神像のような物が懸かった。漁夫は何心なくつぶやくつつそれを海中に遺棄し、猶沖遠く行くうちに和田岬の辺にさしかかった。そこでも亦網を曳いて居ると、不思議や先程武庫沖で見送った神像がまた懸かって来たから、今度は只事ではないと勘づ

き、像を船に乗せ家に帰って齋き祀った。或夜の夢に神の託宣があり吾は蛭児神なり、国々を巡って此地に来たが、此の地より少し西方に好き宮地がある、そこに居らんと欲する、能く計らえよと誨えられた。漁夫は驚いて此の夢の状を里人に語り一同の同意を得て遂に曩の御像を、御輿に乗せ西の方お前の浜さして進み、暫し仮宮に停めたる後、その里人共々相図って好適の地に鎮め参らせたのが現今の戎社である」（吉井良尚氏執筆『西宮神社の歴史』1961・2頁）という伝説があるという。

この伝説の限りでは蛭子大神は漂着神の性格がある。各地のえびす信仰では、海中から石を拾ってそれをご神体とする例が認められている。吉井貞俊西宮神社権宮司は『えびす信仰とその風土』（1989）は長年の研究をまとめられた著書であるが、南九州一帯の慣習を紹介し、大隅半島東岸には正月15日に若者が海中にもぐって手にふれた石を拾いそれをえびす神として祀るという例などをあげている。

真弓常忠氏（八坂神社宮司・前皇学館大学教授）の「エビス信仰の源流」（1978）は、対馬のえびす神の実態調査を手はじめに、えびす神の海神としての性格を指摘し、とくに“えびすがくま”の古跡に着目して、対馬が海の彼方寄りくる神、漂着神を祀る水平型祭祀と、大陸文化の輸入による天を祀る垂直型祭祀の重なる場、その移行する地域と見ているのである。吉井貞俊氏の著書におさめられた「えびすさんの全国調査」は、実際に全国を踏破しての調査報告であるが、そこには、長崎県下に117社の関係神社があり、うち38社は境内社とされ、事代主神社が42社を数えるという。同氏は対馬の竹敷に磯良恵比須社があること、真弓氏の論文の出る前だったが、南方系と北方系の文化の十字路という感じをもったと述べている。

[あずみのいそら伝説]

対馬のえびす神は、多くは神躰石と呼ばれる岩石をご神体のようである。真弓氏は仁位村の和多都美神社にあるひとかかえの石が“いそらえびす”と呼ばれていることに着目して、安曇の磯良伝説に言及している。

この伝説は、太平記巻39によると次のようなものである（ちなみになぜ、えびす信仰についての記述の出典が「太平記」「源平盛衰記」など、“史書”でなく文学的な書物が多いのか、これも興味深い点である）。神功皇后が、常陸の鹿島に天神地祇を集合させたところ、一万の神々が集まったが、磯良神ひとりが来ない。そこで神々はかざりたてて催馬楽の歌を歌う。すると磯良神が姿をみせた。海中に住むために、藻や貝などが体について醜いのを恥じて姿を現さなかったが、歌舞の感動に堪えかねて登場して、みずから細男（せいのを）舞を舞ったという。そして神功皇后の求めに応じて、龍王のもとへ干珠・満珠を取りに行く任務を果たした。この珠によって、朝鮮での海上の戦いのときに、皇后は干珠をかかげて潮を引かせ、敵兵が船から下りた時満珠をかかげて溺死させたという。『八幡宮

御縁起』では、「磯童」が“せいのお”（細男・才男）を愛し、ともに舞ったが、顔の醜さを恥じて、袖で顔をかくしていたという。鈴鹿千代乃氏の「安曇磯良の原像—岩礁信仰を中心に—」（1980）は、この伝説の由来となった、古い海の精霊について、海岸の潮の干満によって姿を現したり隠したりする岩礁にその神の原像をみとめ、それを八幡信仰、隼人、そして和布刈神事との関連で精密な考察をすすめている。

〔津守氏の伝承〕

真弓氏の紹介する“えびすがくま”は、雑知の住吉神社の裏山の前方後円墳「鶴の山古墳」であって、4～5世紀のもので、神功皇后の伝説のある倭の半島進出の時代のものという。この住吉神社の祭神は豊玉姫命と彦波瀲尊で仁位村の和多都美神社とおなじで、五尺ほどの岩の末社恵毘須社がある。対馬の住吉の神は、近世に創建された府内の住吉社以外の5社が、いずれも大阪の住吉大社のツツノオ三神とは異なるヒコナナギサタケノミコト（彦波瀲武尊）などの海宮遊幸神話にまつわる海神を祀っているとされる。ツツノオは対馬の津々浦々に海人によって祀られた神々にルーツがあり、それが摂津の津守氏によって祀られたもの、津守氏は別の海人であった尾張氏の系譜を引くとされるが尾張氏は大和の葛城が本貫（本居宣長以来の説）であるといわれるが、その本願は尾張国でその出先機関が葛城にあったようだ（松前健氏説）。津守氏の氏神である大海神社は現在住吉大社の摂社であるが、その祭神は豊玉彦、豊玉姫であり、対馬の海宮遊幸神話の神々である。

長沼賢海氏の「えびす考」（1916）は、巖島神社文書に見られる仁安2年（1168）の「江比須」の記録を最古のものとし、夷をエビスと読むことを指摘しているのは、そのころは夷社をおそらく“比奈神”と呼んでいただろうと推定している。そして、西宮（広田）夷の建久年間（1190-99）より古いとしている。その後、喜田貞吉氏の「夷神考」（1916）が書かれ、それに対して長沼賢海氏は「夷神再考」（1921）で西宮神社の前身である西宮南宮、大国主西神、広田社の南宮、夷社と三郎社の関係について論じている。現在の西宮神社境内には南宮という広田神社に所属する神社があり、大国主西神社、さらに百大夫社などがあって、その由来はそれぞれある程度わかっていることは『西宮神社の歴史』からもうかがえる。

広田神社は『日本書紀』に神功皇后の新羅遠征からの帰途アマテラスの荒御魂を祀ったという伝説によるが、のち名神大社に加えられ、二十二社にも列せられた。明治維新の後には官幣大社であった。その南に南宮があり、平安末の『伊呂波字類抄』には、その主神は本社とおなじ阿弥陀如来であるが、末社に児御前—地藏、衣毘須—毘沙門、三郎殿—不動明王、一童社—普賢、松原社—大日如来があったとされている。本地垂迹説によって、神仏が習合している（戎社に奉納された1391年～1427年に書写された大般若経599巻—1巻欠—が兵庫県吉川町の東光寺で1948年発見された）。時代のさがるにつれて、戎社の勢力が強

まり、室町末期には、えびすと三郎がひとつになって夷三郎となったようである。

[ヒルコとヒルメ]

さて、神話学者として大きい業績のある松村武雄氏はつとに『神話と民族性』(1934)において、ヒルコとヒルメについて次のように述べている。

「『ひるこ』は『ひるめ』に対する名で、『ひるめ』が日女であるに対し、日男を意味する。即ち『おおひるめむち』と同じく太陽的要素を内在させた霊格である。それが生まれて三年も脚が立たない不具者と考えられ、伊弉諾、伊弉冉二神の天御柱巡りの手段の産果として、海に流されたと伝えられるようになっていく。この神話は恐らくは、古代日本民族が、太陽を一死一生するものと信じ、太陽を新生させるため、聖なるものを、或る器物に入れて、水の上に放ち遣った祭儀から発生したものであろう。

同じように太陽的存在であったものの間に、こうした極端な運命のちがいを生じたことの、少なくとも一つの原因は、『ひるめ』が政治的な内性、機能を持っていたのに対し、『ひるこ』が太陽的要素に終始したところに存すると思う。」(同書398頁)

このヒルコ・ヒルメの対比には、松前健氏、真弓常忠氏、さらに吉井良隆宮司なども言及されている。

松前氏は説く。「蛭児も、一面に『日子』すなわちヒルメに対する太陽の男神であるとか、太陽の子であるとか説く説が、江戸時代の滝沢馬琴以来唱えられ、松本信弘氏や筆者なども、これをつとに可能性ある説と認め、世界に広く分布する『太陽の子』の漂流譚のタイプに属するものと考えている。これは後章でも述べるが、日本でも正八幡のオホヒルメ、蚕の女神の金色姫など、みな太陽の子が流される説話である。そしてこれらは、古代ユーラシア大陸の南岸沿いに分布する『太陽の舟』の信仰と行事に由来するものと考えられるのである。不具の蛭児も、淡路島の海人たちに伝承されていく間に、太陽の子としての『日子』と意識されるようになり、その付近の海岸で行われていた『太陽神の象徴を海に送り流す行事』と結びついて、その由来語として語られるようになったのであろう。こういう下地があればこそ、イザナギ・イザナミ二神が後に、皇祖神姉弟の親神とされるに至っても、その不肖の弟とされたのであろう。」(『日本の神々』71~72頁)

真弓氏も、「津守氏と同族の対馬県直が奉じた太陽的霊格は、海宮遊幸神話に語られる海神のごとく海のかなたから寄り来る神であるとするならば、南方系海洋民に共通の寄神としての日神であったと考えられ、これがヒルコではなかったか。ヒルコ(日子)は、ヒルメ(日女)に対する太陽的霊格であるが、これが後世エビス神と称せられるに至る」とのべている。

吉井良隆宮司の『えびす神研究』(1957)は神社の立場から“えびす”の語源、喜田貞吉氏のえびす神を大国主神に比定する説を批判し、鎌倉時代末期—南北朝時代に行われた文

献（『神皇正統録』、『源平盛衰記』）に拠って蛭児神をヒルメ（天照大神）に対比した太陽男神であると主張している。そして前にも触れた『失われたえびす信仰の本源』においては、その記紀の記述から神格の海神から漁撈神への発展を指摘している。

次田真幸氏の「蛭児神話と太陽神信仰」（1973）は『日本神話の構成』に収められているが、そこにも蛭児＝日子という説を支持し、滝沢馬琴『燕石雜志』巻一をはじめ、加藤玄智、松岡静雄、松本信弘、中島悦次らの諸氏も同様の意見であるといい、松本信弘氏が太陽の子が密閉された器で川や海に流されるという神話がインド、西インド、マレー・ジャバなどに分布していることを指摘している。その尊い神が、「記紀の神話体系が形成されるころには、このような信仰はまったく失われており、むしろこの神を排除しなければならぬ事情のために、良からぬ子もしくは不具の子として、あるいは産み損じの子として放ち棄てられる運命を背負わされたものと思われる。『ひる』を表記するのに『蛭』の字を用いたのも、『ひるこ』に対する嫌悪の情を反映したものといえよう」とまで指摘している。

大林太良氏は『神話の系譜—日本神話の源流をさぐる』（1986）のなかでイザナキ・イザナミ神話を中国江蘇省雲台山の伝承「三官伝説」を比較して、興味深い分析を試みている。江南の地は日本の稲作伝来の起点となった土地であり、その神話との比較は非常に関心を呼ぶが、古代の呉や越の資料は限られていて、まとまった形では伝承されていないということであり、この「三官伝説」も「西遊記」とかさなる部分も少なくないようであり、西遊記以後のものという。しかし、十分に日本の古代の伝承と比較できることが多いことを指摘している。また別に、国生み神話が東南アジア、華南の洪水神話—洪水で人類が死にたえ、ただ兄と妹だけが生き残る。近親で結婚できないので、その近親婚の禁止を解く呪的儀礼をおこなって子孫を生む—と洪水が脱落しているだけで内容は細部までまったく同じという。岡正雄氏はこの神話が南アジア語族を担い手とする母系的・陸稲栽培・狩猟民文化が、縄文末期に華南から日本にもたらされたという。大林氏は兄妹始祖型洪水神話とイザナキ・イザナミの国生み神話の関係を指摘する岡説に賛成しつつ、さらに分析をすすめ、上界と下界の闘争で洪水が起き、兄妹二人が逃れ、結婚して子孫を増やすという宇宙闘争型洪水神話にも共通することがあるが、むしろ、宇宙闘争型よりも原初洪水型—原初に洪水が起き、その水中からそびえた岩に天から兄妹が天下る。はじめ性交の方法をしらず、鳥（記紀ではセキレイ）に教えられる—に近いという。このように、列島周辺の諸文化にも共通点が認められているのは、意義深いことであり、今後の研究が期待できるだろう。

【蛭子大神と事代主神との関係】

吉井良隆宮司の「えびす神研究」によると、西宮神社関係神社明細帳（1932・3月現在）のえびす様の数は合計5,570社。その主祭神は大国主神、事代主神、蛭児（子）神の三柱で

あり、うち蛭児をご祭神とする社が過半数を占めているという。しかし、近世になってからの西宮から配布される御神影像是釣り竿と鯛をかかえた図像である。それは出雲神話に登場する事代主神のイメージにほかならない。大国主神の息子で「国譲り」の際に重要な役割を果たしている。出雲の稲佐浜の大国主命のもとに大和からタケミカツチ神とアマノトリフネ神（『古事記』による）が訪れ、国を大和に譲るように要求する。大国主は息子の事代主に相談するという。事代主が美保の崎の漁からもどり、むしろ進んで大和朝廷へ土地を返却すべきだと父神に具申、みずからは、海原に青柴垣を築いて、そのなかに隠れてしまったという。反対したもう一人の子のタケミナカタ神は、力くらべに負けて信濃の諏訪湖に追いつめられて降参した。

次田真幸氏の「国譲り神話の構造」（『出雲神話』1976所収）は、天孫降臨にさきだつ葦原のナカツクニ平定の神話の分析である。高天ケ原・中ツ国・黄泉ノ国という三重構造の世界をふまえたもので、神々の属性を解明している。そこでは、事代主神が壬申の乱にあたって託宣すること、それがこの神の登場であったことを、西田長男氏『古代文学の周辺』（1964）の説を支持している。“事代”は託宣という意味である。

フィンランドの神話研究者である高橋静男氏の「国譲り神話と天地創造神話」（大林太良編『日本神話の比較研究』1974所収）には、カレワラ神話のヴァイナモイネンと日本神話のオオナムチ（大国主神）に共通する国土開墾、農耕起源、国内平定、根の国訪問、巫医、文化起源、英雄などの神としての性格の共通点を指摘して、最後に“国譲りする神”という点の共通性を指摘している。非常に興味ある論文であるが、残念なことに事代主神についての言及はない。ただ、新しい統治者に国を譲って、「海へ去ってゆく」という記述は、事代主神の海中に八重の青柴垣を作ったという伝承に近いことに注目しておきたい。

[美保神社]

和歌森太郎氏は『美保神社の研究』（1955）で知られているが、その「事代主神と美保神社」（吉井良隆編『えびす信仰事典』1999所収）はその一部である。そこで和歌森氏は、美保神社の祭神は現在事代主神とその義母にあたる三穂津姫命で、この二神を“美保型社殿建築”と呼ばれる、大社造りの変態—二棟を一基底に並べた、比翼大社造りの社殿に祀っているが、じつは事代主神は江戸時代後期になって今日のように祀られることになった、という説を提出されている。三穂津姫命は、国譲りの際に天津神の高皇産霊尊の娘で、稲穂をもって美保関の客人山に降臨して、大己貴命すなわち大国主命に嫁いだとされている神である。のちに事代主神がその高い地位と、神話にあるような美保岬へのゆかりもあって、しだいに主神の座を占めるようになったという。

美保神社の青柴垣（あおふしがき）神事については、美保神社宮司の横山直材氏の「美保神社の青柴垣神事」（吉井良隆編『えびす信仰事典』1999所収）がある。かつて1974年6

月、NHK テレビの「市民大学講座」として伊藤幹治氏とともに「柳田國男の世界」を担当して、四回にわたって放送した。その際に和歌森先生にもご出席いただき、比較的詳しくお話をいただいた。（伊藤幹治・米山俊直編『柳田國男の世界』日本放送出版協会1976、155～163頁）そこで和歌森先生は、美保神社は国幣中社であるが「民間信仰の対象としては、恵比寿さんの性格をもって来たんです。漁の神さまということになって崇敬されてきました」として70軒ほどの家から選ばれる頭屋（当屋）二人が、前年に決まっていて、それから一年間毎日シオカキ（みそぎ）をして身を清めている。3月31日の夜からはじまるオコモリ（参籠）、頭屋の印のオハケ立てにはじまり、シオカキ（禊ぎ）、バツカイソウ（抜解奏）、オコモリ、ナオライと、5日までの一連の行事を営む話をされた。4月6日にはミフネカラミ（御船絡み）で二隻の船を儀礼的に飾り、斎竹をたて注連縄を取り付ける。翌7日が神事の本番で、神社で宮司らが待つところへ頭屋から行列が到着、ともに頭屋に列をなしておもむき、そこから乗船して港の中央から宮灘に到着、出迎えを受けて神船の中で舞が奉納され、その後一同は上陸して神社にもどるが、一連の式次第がある。この4月の神事とともに、12月2日の諸手船（もろたふね）神事がおなじく特殊神事として有名である。

現在は主神とされている事代主神が、江戸末期に登場すること、また比翼大社造りの本殿の建立が1813年（文化10年）であることなどからも、事代主神がえびす神になったのはもしかするとかなり新しいことではないか。古くから全国の海岸に広がっていた海神信仰としてのえびす神が神道の神としての事代主神になっていったのは、極端に言えば19世紀初頭ということになるのではないだろうか。今日多くのえびす神を祀る神社がその祭神を事代主神としているのは、江戸期に国学が興り、神道についての知識が庶民のあいだにひろがってゆくなかから、あるいは明治維新の廃仏毀釈のうごきと国家神道の組織化されてゆく過程で、えびす神と事代主神が“習合”していったのではないだろうか。

三 市神としてのルーツ

[瀬戸内海]

もっとも、蛭子社、荒胡子社という名称は古くから存在している。巖島神社の摂社も荒胡子社である。宮島の七浦七恵比寿の小祠（杉ノ浦、鷹ノ巣浦、腰細浦、青海苔浦、山白浦、須屋浦、御床浦）を私たちは一巡する機会を得たが、これらの恵比寿は「御島巡り」という宮島信仰のなかで管弦祭とならぶ巖島神社の二大年中行事になっているという。その担い手は古くから己斐村（現広島市）から大竹村（現大竹市）にいたる沿海域の巖島講であったという。宮島は海の神、豊漁の神として広島、愛媛、山口県下の漁民の信仰をあつめたばかりではなく、こうした農民的信仰空間でもあったと谷富夫氏は「宮島にみる瀬

戸内の信仰と宗教」(大林太良編『瀬戸内の海人文化—海と列島文化9』1991)で指摘している。この論文の収められている『瀬戸内の海人文化』には、編者大林太良氏の「内海の文化」という目配りのよい序章をはじめ力作が集成されているが、そこでは瀬戸内海文化圏の人々の民間信仰にえびすの他にも住吉信仰、金比羅信仰など海神信仰の存在を教えてくれる。宮本常一氏はその遺稿『日本文化の形成』(1981)で、瀬戸内海文化の系譜を説き、海人に：

- ①北九州から下関海峡を経て瀬戸内海に入り込んだもの、
- ②南九州から豊予海峡を経て入り込んだもの、
- ③古くから内陸海岸に居住していた人たち、

の三群を分けている。

①群は宗像の神を奉じて東に移動した人々で、宗像神がまつられアマ郷が成立する。②群は男漁女耕型で大山祇の神を祀る。四国側に多く村上水軍もこの流れ。③群は内海沿岸の在来の民で、住吉の神を祀る。多く遠浅の場所で「遠浅は磯の貝をとることができる。ということは半農半漁の生活が最初から成立していた」(宮本：1981：297-324頁)とする。

えびす信仰のルーツであるヒルコ信仰が淡路島ないし瀬戸内海東部にその発祥の地があり、のちに記紀神話に織り込まれていったとすれば、えびす信仰はこの三類型よりも古いものではなかったか。

[市神として]

市の発生と発達は、人類の歴史とともに古い。記紀神話にも海幸彦、山幸彦の交換が描写されているし、近年の青森市三内丸山の縄文遺跡からも遠距離交易の証拠であるヒスイ、コハク、黒曜石、アスファルトなどが発掘されている。海神、漁撈神としてのえびす神が、その産物を交易する場としての港ないし海岸で市の神になっていったことはきわめて自然なことといえよう。市のたつ港は、同時に人々や情報の集散地であったこともまた容易に理解できる。

[百大夫社と傀儡師]

そして、市場のある港町は芸能を育てる場でもあった。現在は西宮神社境内にある百大夫社は、西宮の“戎かき”と呼ばれた傀儡師の祖と呼ばれる百大夫を祀った神社で、大江匡房の『傀儡師記』という平安末期の記録が残されている。傀儡師は奇術・幻術や軽業などもおこなったが、その人形操りに人気が高く、“木偶まわし”と呼ばれていた。平安末期の『伊呂波字類抄』の摂津国の神社名のなかに広田神社の摂社に夷社と百大夫社が登場するから、西宮のえびす社とともに古いといえる。百大夫の集団は、現在の西宮市内の散所(現・産所町)に居住して、えびす社の日常の雑用に奉仕するとともに、操り人形を用いて

近辺を廻り、室町時代には永禄11年（1568）には宮中に参上して“えびすかき”を上演した記録を初めとして、文禄4年（1595）までの記録があるという。鈴鹿千代乃氏の「『海人語り』の構造」（吉井良隆編『えびす信仰事典』1999所収）は、古代の志賀海神社（福岡県）を拠点とする海人族の芸能集団の物語を「海人語り」と呼んで、傀儡子として各地に芸能を演じてまわり、その神として百大夫（安曇磯良でもあるという）を祀っているとする。そして志賀海神社の祭神が安曇磯良であるという説を紹介、九州各地の八幡宮、たとえば宇佐八幡宮放生会の語り、美保神社の海人語り、そして西宮の海人語り、その向かいの淡路島の海人語りを紹介している。

吉井良隆氏「人形操りと百大夫信仰」（同上事典所収）によれば、淡路の人形操りの名手であった市村源之丞が大阪に出て人形芝居を興業して成功を収め、それが現在の「文楽」になったとされる。

かくして、交易の場としての市が同時に芸能の普及に貢献し、それがえびす信仰の普及にも大きく貢献したことがうかがえるのである。

四 福神としてのルーツ

[福神えびす]

海神、漁撈の神、市の神、そして間接的には芸能の神となったえびす神は、農村にも普及する。柳田國男氏の「百姓恵比須講」（北見俊夫編『恵比寿信仰』1991所収）は、『年中行事覚書』（1955）の一部であるが、海人の神であったえびす神が農民、商人にも広がっていく過程をたどり、百姓恵比須講が神無月の行事であることから、より庶民的なものとして定着していった点を指摘している。それが正月の商人仲間の恵比須講よりもおくれて始まり、ことに収穫期のあとの初冬に移ったという。田の神が山の神になるのがその時期であった。また、漁業は広域の交易とともにリスクの大きいものであるが、それに比べて農業は安定している。その農村にもこの神が普及したことはそれだけの理由があったといえる。柳田國男氏は「祭りの式ばかりは、いつと無く商家の恵比須講に近くなって来た。それを農民の商業化と、見る人があっても致し方はないのであった」という。

[福神成立の過程]

福神の成立成長についての研究は、喜田貞吉氏の「福神沿革概説」「七福神の成立」と『福神の研究』（1935）に収められたものが先駆的な業績であるが、宮田登にも「福神信仰の系譜」（『近世の流行神』1972所収）がある。喜田氏の「成立」には、この七という数字は、仏教教典（仁王経・法華経）にある“七難七福”という言葉のように、名数（たとえば三管領・四職、五山・十刹）の流行した室町時代には、神仏についても三所明神、五社明神、

七社、八所明神、十二社大権現、三十三か所観音霊場あるいはその中から選んだ七観音など)が流行していた。そのなかで禅僧仲間でよく話題になった“竹林の七賢人”になぞらえて七福神が登場したのだという。狂言「七福神」などが存在しているから、室町末期には七福神という言葉は広がっていたのだろう。

その成立前から、鞍馬の毘沙門天、比叡山の三面大黒天、西宮の夷三郎、竹生島の弁財天などが福神としてそれぞれ崇敬されていた。とくに恵比須大黒が対になってしばしば絵画などに登場してくる。京都でまず始まったこの七福神信仰、また恵比須大黒信仰は、江戸時代には江戸でも流行する。現在は各地にみられる七福神巡拝が、「谷中を中心に不忍池弁天堂、護国院大黒天、天王寺毘沙門天、長安寺寿老人、修性院布袋、青雲寺恵比須、東覚寺福祿寿。向島を中心に多聞寺毘沙門天、白髭神社寿老人、百花園福祿寿、弘福寺布袋、三国神社大黒・恵比須、長命寺弁財天」と宮田登氏があげるようにたくさんできた。宮田氏は文化文政期(1804~1829)に盛んになり、もっと広域の、「不忍の弁財天、谷中感應寺の毘沙門、同長安寺の寿老人、日暮里の青雲寺の恵比須大黒布袋、田畑西行庵の福祿寿」詣でが盛んになったと『享和雑記』巻4にあるという。初めは鈿女命(うずめのみこと)だったが、竹生島の弁財天が流行したのでそれに代わったという。

また、宝船に七福神が金銀財宝を積んでやって来る図柄の絵が、江戸町人たちにもてはやされ、その絵を正月2日の夜、枕の下に敷いて寝るとよい夢が見られるとされた。歌謡にも七福神がよく登場している。

福神にたいするものとしては疫神、また厄神がある。大島建彦・紙谷威広両氏の論文が宮本袈裟雄編『福神信仰』(1987)に収録されている。

疫病神は人の姿をして現れるという話が古く『今昔物語』巻27の11話などにも登場する。江戸時代にも疫病神、疱瘡神が巷をさまようと言われた。また貧乏神も家を訪れて貧乏にするとされた。他方で福神もまた来訪する神とされていた。

本来は食物供給、交通安全、災厄攘除をもたらす、農業神としての宇賀神、御食津神やさらに古くは山幸、海幸をもたらす神々が福神であったが、喜田貞吉氏は「時代の推移とともに、財宝、官禄、和合といった欲望の満足のために、福神の信仰は複雑なものとなり、大黒神と夷神が盛んに祭られるようになり、室町時代以降、種々の福神が加わって、七福神として確立してきたものと考えたのである。」(紙谷威広「福神と厄神」：宮本編前掲書59頁)

[メーカーとユーザー]

かつて私は加藤秀俊氏とともに『日本人の信仰』(1972)を編集した。それはエッソスタンダード社の出していた「エナジー」という季刊誌で、高田宏氏が一人で推進している、いわばメセナのはしりのような雑誌であった。そこで窪徳忠、竹田聴洲、林屋辰三郎、梅

棹忠夫、伊藤幹治の各氏と加藤・米山という顔ぶれで大規模な座談会をおこなった。私はその司会で、これは日本の宗教（レリジオン）ではなく日本人の信仰（ビリーフ）を論じたいとし、議論はメーカーとしての宗教に対するユーザーの立場・視点を強調することになった。そして結論は多元的共存を是認する“日本的信仰心”が結局は人類にとって最も好ましいということになった。

えびす信仰もまたこの多元的共存のうえに成立している。日本人は早くから宗教離れをした人間集団であると、私はかねがね主張してきたが、その信仰は個別的にいわば対症療法的につづいている。受験には受験の神、商売には商売の神、海上安全にはその神、というように個別の願望を成就させてもらうべく祈願する。それは国家がその敵国を降伏させるべく祈願したり、戦没者の鎮魂のために祈願したりすることとは違う、個人的なものである。えびす神はまさしく庶民の願望を満たすための祈願の対象として、近世以降、国家神道とは関わりの無いところで繁盛してきたのである。ヒルコはヒルメー太陽女神であるアマテラスを中心とする神々の序列から除外されてきたが、西宮の浜に漂着して、人々の祈願を受ける存在になった。おなじようにえびす神を祀った神社が五千以上存在し、人々の願い事を聴いている。さきにあげた「エナジー」32号には、伊藤幹治氏の作成した「ご利益からみた民間の神々の諸相」というチャートがある。上段に職業、人生、災害、病気の区分があり、下段に神（および神社）の名が対応するように挙げている。それで気がついたのであるが、えびすの登場する場所が意外に多いのである。すなわち、商業—恵比須、漁業—恵比須、林業—恵比須、農業—恵比須というように対応している。このチャートで、えびす様の神徳の広さをあらためて確認したのである。

このように、海神としてのえびす神は市神となり、さらに福神になってきたのである。

五 おわりに

えびす信仰研究のひとつの区切りとして、この論文は執筆された。3年間にわたる研究会は一応終結し、あらためて民間信仰の共同研究会をつづけていくことにした。その間、西宮神社の吉井良隆宮司、吉井貞俊権宮司をはじめとする皆様には、たいへんお世話になった。この機会に感謝の意を表しておきたい。連年十日戎を開門行事を見てから大阪の今宮戎、京都に戎神社そして八坂神社の蛭子社を巡拝した。また、昨年から復活した海上渡御に学生たちと共に参加することになり、本年はさらに他大学の参加もみることになったのは、嬉しいことであった。今後もさらに深く、詳しくえびす信仰の現状、現場を見ておきたい。

主要参照文献

- 厳島神社社務所『伊都岐島』厳島神社社務所、1976。
大林太良『神話の系譜—日本神話の源流をさぐる』青土社、1986。
大林太良編『日本神話の比較研究』法政大学出版局、1974。
大林太良編『瀬戸内の海人文化』海と列島文化9、小学館、1991。
大林太良・吉田敦彦監修『日本神話事典』大和書房、1997。
加藤秀俊・米山俊直編『日本人の信仰』Energy32、1972。
北見俊夫編『恵比寿信仰』雄山閣出版、1991。
宮本袈裟雄編『福神信仰』雄山閣出版、1987。
宮本常一『海に生きる人々』未来社、1964。
宮本常一『日本文化の形成』上中下、河出書房新社、1994。
講座日本の神話5『出雲の神話』有精堂、1976。
松前健『日本の神々』中央公論社、1974。
安津素彦・梅田義彦監修『神道辞典』堀書店、1968。
吉井貞俊『えびす信仰とその風土』国書刊行会、1989。
吉井良隆『神社史論攷』西宮神社、1990。
吉井良隆編『えびす信仰事典』戎光祥出版、1999。
吉井良尚『西宮神社の歴史』西宮神社社務所、1961。